

かったろう。文学批評家コダーマ=イブン=ジャアファル (*Qudāma ibn Ja'far*, 回暦 337=西暦 958 年没) は、著書『散文批評 (*Naqd an-naṭr*)』の中で、低い文体 (サヒーフ *saḥīf*) と高い文体 (ジャズル *jazl*) の 2 つを区別し、この 2 つをどのように使い分けるかについて細かく指示している。コダーマが「高い文体」と規定したのがアラビア語の散文体で、公文書などに見られ、形式にこだわってごてごてと飾り立てた文体である。この類の文章には、韻を踏んだ部分が多くつもあって、これがアラビア語の典型的なスタイルとなって、文学以外の著作でもこの種の散文を取り入れた序文で始めるのがしきたりとなっている。たとえば、ザマハシャリー (*az-Zamaḥṣarī*, 回暦 538 =西暦 1144 年没) の『文法詳解 (ムファッサル *Mufaṣṣal*)』の序文の最初の文は、内容本文のふつうの文と対照的である。

神 最も讃美されたる について こと 我をして の内 学者たち [定] アラビア語
Allāh^a 'aḥmad^a 'alā 'an ja'alanī min 'ulamā'ī l-'arabiyya^{ti}
 そして 我に天性を与えた について [定] 保護 ため [定] アラブ と [定] アラブ部族連帯
wa- jabalanī 'alā l-ḡaḍabī li- l-'Arabī wa-l-'aṣabiyya^{ti}
 そして 防ぎし 我を こと 孤立する より 内 その支援者らの そして 飛び出る
wa-'abā lī 'an 'anfariḍ^a 'an ṣamīmⁱ 'anṣārⁱ him wa-'amtāz^a
 そして 集う へ 連中 [定] シュウビーヤ運動のそして 離れる
wa-'andawiy^a 'ilā lafīfī š- šu'ūbiyya^{ti} wa-'anḥāz^a
 そして 我を守った より 彼らの宗派 [定] [否定] 手にする 彼らの上に 以外 [定] 投げ
wa-'aṣamanī min madhabihim alladī lam yujdi 'alayhim 'illā r-raṣq^a
 による 舌 [定] 呪う者らの そして [定] 中傷 による 歯 [定] けなす者らの
bi-'alsina^{ti} l-lā'inīna wa-l- maṣq^a bi-'asinna^{ti} ṭ- ṭā'inīna

アラビヤ ジャアラニー
 我をしてアラビア語の学者の 1 人となし、
 アサビヤ ジャバラニー
 我にアラブとその部族連帯を守る天性を与え、
 アムターザ アンフアリダ
 飛び出てアラブの仲間らの中より孤立するを防ぎ、
 アンハーザ アンダウイヤ
 離れてシュウビーヤ運動の連中へ集うを防ぎ、
 ライニーナ アルスイナ ラシユク
 呪う者らの 舌 による攻撃と、
 ターイニーナ アスイナ マシユク
 けなす者らの 歯 による中傷のほかにも

もたらさざりし彼らの宗派より我を守りし神に、最高の称えあれ。

(『文法詳解』 p. 2)

これほどごてごてした文体は他の言語にはとても訳せないだろうから、イブン=ファリス (『言葉学に関するサーヒブの書』 p. 13 を参照) のようなアラブの学者たちが、アラビア語は翻訳不可能だと信じていたことも納得がいく。文

人々もプライベートには口語体を使っているにもかかわらず、教育の高さ、社会的成功、社会経済階層の高さと結びつけられる。家族や家庭の言葉としての口語体という別の視点からみると、口語体は仲間内や親密さ、友情と結びつき、逆に文語体は社交上の隔たりや関係の公式性と結びつけられる。したがって文語体を使うことは相手への尊敬の表明でもあるが、また相手との間に距離を置くことでもある。口語体を使うことが相手を見下していることになったり、逆に親密さや謙遜の表現にもなるのは、英語でファースト=ネームを使うことが親しさの現れだったり社会的な侮蔑だったりすると似ている^{*343}。

文体の目印の選択は意図的であり、たとえば商業的な目的で操作されたりすることもある。メディアの言葉や、とくにエジプトの広告では、商品の性格や販売ターゲット層との関係で文体レベルが選ばれる。ローンや保険証券といった堅い社会的商品は、ほとんどが男性視聴者を対象に高いレベルの文体を使って「販売」されるのに対して、食料品や洗剤のメーカーは主婦を主なターゲットにしており、口語体で製品の広告をする。広告主は、口語体による親密さや親しみと、文語体による威信や知的レベルとの間でうまくバランスを取らなければならない(Bassiouney 2009b)。

このようにさまざまな文体をみごとに操っている例を、政治の分野ではエジプトの故ナセル大統領(1918～1970年)の政治演説に見ることができる。ナセル大統領は演説で、最初は高い文体でゆっくりと一定のリズムで話し始め、場の公式さを打ち出す。しかしその後、文は徐々に口語体になっていき、テンポは速くなり、ついには純粋な口語レベルに行き着く。演説の最後は、また口語体の混ざらない文語体の文で締めくくられる。このようにいろいろな言葉を混ぜて話すことは、アラブ世界の政治家にとって特有の問題の反映である。聴衆の大部分は高位体である文語体を使わないし理解もしないから、そのような聴衆を引き込むためには口語体に合わせたいのだが、それでは聴衆を馬鹿にしているととらえられかねないので、安易に口語体に切り替えるわけにはいかない。

このスタイルの演説は決してナセルだけのものではないし、ナセルがこのようなスタイルを使った最後の1人でもない。このようなスタイルは、現代のイスラム主義的な政治家たちも使っている。彼らは、ナセル大統領のアラブ民族

^{*343} 以上のような状況は、日本語の敬語体系と対照することができる。